



## 質の高い連携のために求められることは



医療情報部・管理部 部長  
まつだ まさき  
松田 雅樹

私の所属している部署では、施設環境の整備、医療機器・備品・消耗品・リネン・制服の購入や管理、医事請求、DPCに関わる業務、院内保育など、運営上のさまざまな業務をおこなっています。診断や治療の場に直接関わることはありませんが、スタッフ一同、安心と満足の医療に運営の立場から貢献しようと、誇りをもって仕事に取り組んでいます。

病院を取り巻く状況を眺めてみますと、実際、大変多くの人との連携なくして、病院が成り立つことはないと考えられます。例えば、患者の治療に不可欠な注射針一つとりましても、メーカー、ディーラー、発注担当者、配送スタッフ、医療者へと多くの人と場所を経由して治療の場に届きます。このような診療材料だけでも何千品目もあるわけですから、関わっている人は想像もできないほど広範囲に及びます。そして、そこに関わっている人々やその家族が、病院を訪れ、患者として治療やケアを受けることがあることを考えますと、病院は社会や地域をつなぐ器の役割も果たし

ていると思います。

そこで、その器を大きく、質を高めていくにはどうすればよいか。私は、まず第一に、病院に関わってくれている院内外の多くの人に感謝し、その思いを伝えていくことが何より大切ではないかと思っています。小さなことのように見えて、それが信頼関係を強め、連携の輪が広がり、質の向上にも大きく寄与することにつながると思います。連携の体制や方法も大切ですが、心の根底に常にお世話になっている身近な人への感謝の念を忘れないよう、日々業務に取り組んでいきたいと思っています。



納入された物品を確認する物品管理課のスタッフ

# 病院 15 周年記念 健康セミナー&コンサート

当院は、平成 12 年にクリニックから病院となり、昨年は 15 周年の記念の年でした。平成 27 年 12 月 10 日（木）には「15 周年記念講演会」として、アイザック 小杉文化ホール ラポールで、第 4 回健康セミナーを開催しました。講師は、真生会富山病院アイセンター長である館奈保子医師。「よく見える目で一生元気に！」と題して、さまざまな目の病気について解説しました。前半は、加齢とともに増えると言われる白内障と、その奥の目の病気について。日頃は仕事や家事などで忙しく、健診を受けていても受診の機会を逃し、いよいよ見えなくなってから外来を受診される方があるそうです。医療技術の進歩によって現在では日帰りの白内障手術も可能になりました。後半は目の成人病について。糖尿病の合併症の一つである糖尿病網膜症では、糖尿病になってから眼底出血が現れるまでに 7～8 年かかると言われます。内科と眼科が連携して治療にあたるのが重要になってきます。



館アイセンター長

講演後のパネルディスカッションでは、パネラーとして館医師、アイセンターの福留隆夫視能訓練士と川渕佑香理看護師が参加。アイセンターで検査を行う視能訓練士の福留さんは、県内に 5 人しかいない認定視能訓練士です。正確で安全な検査を行い、医師に検査データを提供、診療に役立てます。アイセンター看護師の川渕さんは、手術を受けられる患者さんの不安を受け止め、安心して手術に臨めるよう努めています。また、アイセンターの検査機器を維持・管理されている三和器械株式会社の長原謙二社長にもご参加いただき、機器メーカーの観点から意見をいただきました。司会・進行は、健康セミナーではおなじみ、富山シティエフエムアナウンサーの水上啓子さんでした。



福留視能訓練士



川渕看護師

講演のオープニングは、全盲のピアニスト YOUTA（ユータ）さんの演奏で始まり、ピアノの優しい音色で会場は感動に包まれました。富山市に生まれ、4 歳で小児ガンにより失明した YOUTA さん。音楽と出会い、現在はテレビ番組の挿入歌なども手がける作曲家として活躍中です。今回はサプライズとして、館医師が大ファンである沢田研二さんの「時の過ぎゆくままに」の演奏もあり、館医師も「元気をもらいました」と大感激でした。



YOUTA さん

講演開始前には、リハビリテーション科のスタッフが肩こりの悩みに答える特設コーナーを開設。姿勢チェックや簡単な肩こり体操、バスタオルで作る枕の紹介などがあり、来場者は「とても勉強になりました」と満足そうに会場を後にされました。

また、12 月 25 日（金）には、「15 周年記念年末コンサート」を開催。いみずムズムズくんやソプラノ歌手の広瀬美和さんなど、特別ゲストの参加もあり、たくさんの参加者と楽しい時間を共有することができました。



いみずムズムズくん  
中島管理栄養士

広瀬美和さん

ミュージックベルに初挑戦



刀塚医師と明橋医師のバンド「D・A・T」

# 症例検討会

真生会富山病院の「病診連携の会」は、開業医の先生より紹介いただいた症例の中から毎回数例を選び、診断治療とその疾患に関するミニレクチャーを行っています。「明日の診療に役立つ」、日常の臨床に即した内容を心がけております。どうぞ、お気軽にお越しください。

<症例：80歳代 女性> 担当：古谷正晴（外科医師）

【主訴】浮腫

## 【現病歴】

高血圧、心房細動、骨粗鬆症にてA医院通院中であった。全身性の浮腫を認め、精査の結果、直腸腫瘍と鉄欠乏性貧血を認め、当院消化器内科に紹介された。大腸内視鏡検査にて直腸癌と診断され、手術目的に入院となった。

【既往歴】労災で腹部・下肢の皮膚外傷。薬剤アレルギー：なし。喫煙歴：なし。

## 【身体所見】

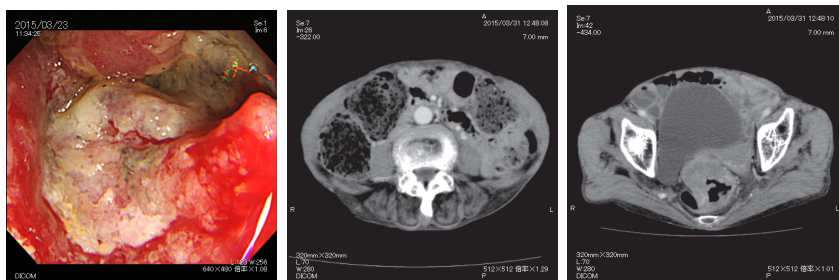
体温 35.5℃、脈拍 72 回/分、血圧 140 / 82mmHg、SPO2 98%（室内気）、呼吸音：清、心音：広範囲収縮期雑音あり、腹部：膨満・軟。圧痛なし。腸蠕動音亢進。

## 【血液検査所見】

白血球数 4470、赤血球数 316 万↓、血色素量 8.2 ↓、ヘマトクリット 26.5 ↓、MCV 84 MCH 25.9 ↓、MCHC 30.9 ↓、血小板数 31.4 万、総タンパク 6.6、アルブミン 3.7、CEA 168.2 ↑、CA19-9 128.5 ↑。

## 【画像所見】

下部消化管内視鏡検査にて直腸 S 状部 2 型進行癌あり。腹部 CT にて口側大腸内に糞便が充満。遠隔転移なし。



写真（左から）

- 大腸内視鏡所見
- 腹部 CT：口側大腸
- 腹部 CT：直腸 S 状部



写真

- 切除標本

## 【入院後経過】

術前に赤血球濃厚液を 4 単位輸血し、直腸前方切除術、虫垂切除術施行。術中結腸洗浄を行い、一期的に吻合した。術後経過は順調で、第 22 病日に軽快退院。術後補助化学療法は行わず、現在も無再発生存中である。

【病理組織学的所見】高分化型腺癌。漿膜下層までの浸潤あり。リンパ節転移なし。

## 救命救急委員会の紹介

当院は射水消防署や地域の医療機関と連携し、24時間体制で救急患者を受け入れております。救命救急委員会は、救急対応のレベルアップ、救命率向上を目的に、下記の活動を行っております。メンバーは医師、看護師をはじめ、臨床工学技師、放射線技師、事務職員、フロアマネジャーを加えた21名です。

■一次救命処置（BLS：Basic Life Support）、二次救命処置（ALS：Advanced Life Support）講習会  
年間合計12回開催しています。講義の後に、胸骨圧迫・AED、除細動・心電図波形の見極め、人工呼吸・気管挿管の実習を行い、シミュレーションで手順を確認します。胸骨圧迫と人工呼吸の実習では、評価機能付きシミュレーターを使用します。技術を点数化し、一人一人の弱点を重点的に練習することで、技術が向上します。

■外来での急変対応シミュレーション訓練

胸痛発作、呼吸不全、吐血、アナフィラキシーショックなど、過去の症例をもとに、今年度は9回実施しました。急変現場を想定した訓練を行い、チーム医療に必要な技術を習得します。いつどこで急変が起きても正確かつ迅速な対応ができるよう、定期的に行っています。



救命救急委員会のメンバー

■地域活動、生死を分ける事故現場に遭遇

射水市内で中学2年生対象のBLSに、講師として参加しています。生徒とともに救命処置の練習に汗を流し、「命の大切さ」を学びます。以前、当院職員が交通事故現場に遭遇し、心肺停止した幼い子供2人を救命したことがありました。救急隊到着までの数十分間、周囲の人と協力し胸骨圧迫を行い、命を繋ぎ留めたのです。その職員は、「日頃の講習会・訓練に参加していたので、勇気を持って行動できた」と語っていました。

いついかなる場合でも、職員が人命救助に最善を尽くせるよう、今後も指導・教育に努めます。

## 認知症サポーター養成講座が開催されました

平成27年12月24日と平成28年1月28日の2日間、当院5階の大講堂にて認知症サポーター養成講座が開催され、医師、看護師、検査技師、リハビリスタッフ、歯科衛生士、事務系職員など、多職種のスタッフが参加しました。認知症サポーターは、認知症について正しく理解し、認知症の人や家族を温かく見守り、支援する応援者。認知症サポーター養成講座の修了者にはその証である「オレンジリング」が授与されます。当院では87名の認知症サポーターが誕生しました。

当日は射水市内のケアマネジャー、射水市職員の方々のご協力により、地域の高齢者の状況と市の取り組みを学んだあと、認知症高齢者と思われる人への声かけ体験も行いました。声かけの想定は、「食後、病室で薬の確認をしているが、理解されない方への対応」など、院内で発生しうる事例ばかり。実際に声かけを経験した職員も、見学していた職員も、自分の業務に引き当てて考え、今後どのような声かけ、対応をすればよいか学ぶことができました。



声かけ体験の一コマ



参加者で記念撮影（12月24日）